『世界の日本語教育』11, 2001年6月

上・超級日本語学習者における発話分析
——発話内容領域との関わりから——

荻原稚佳子[1)]・齊藤眞理子[2)]・増田眞佐子[3)]
米田由喜代[4)]・伊藤とく美[5)]

キーワード: **ACTFL-OPI, 発話内容領域, 発話の構成, 談話の形, 文法能力**

要　旨

本研究は，上・超級日本語学習者の発話の特徴を明らかにすることを目指し，ACTFL（全米外国語教育協会）から日本語のOPIテスト（口頭面接テスト）のテスター認定を受けた試験官が行なったものである．OPIテストの録音テープから，超級，上級の上・中・下の各々の典型的なものを選んで分析対象とし，母語話者とも比較した．

まず，話題の種類と述べ方から発話内容領域という概念を設け，それを3つの領域——I. 身近な具体的事実を直接的に言う，II. 個人的一般的関心事の具体的事実を詳述する，III. 抽象的内容を論じる——に分けた．各被験者の発話について，この発話内容領域を軸として，試験官の要求への対応・発話の構成・談話の形・文法能力（語彙の広がり，誤用，言い直し，接続表現）を分析した結果，上・超級話者の各レベルの発話の特徴を具体的に示した．

また，上級から超級への移行の過程が明らかになった．全分析項目において，なだらかな発達がみられるわけではなく，発話の構成・抽象的表現の使用・言い直し・接続表現・誤用などの項目では，上級と超級で大きい違いがみられた．また，発話内容領域によっても，レベル差が大きく現れる項目が異なっていた．これらの結果から，いくつかの分析項目では，ACTFL-OPIの基準で示されているレベル変化とは異なる，大きく変化する段階があることも分かった．

さらに，今回行なった母語話者との比較から，超級話者のほうが母語話者より論理的に話したり，和語を多く使用することが認められた．

1. はじめに

1–1. 研究の背景

本研究は，全米外国語教育協会（American Council on the Teaching of Foreign Languages:

1) OGIWARA Chikako:　早稲田大学国際教育センター非常勤講師．
2) SAITO Mariko:　文化女子大学教授．
3) MASUDA Masako:　中央大学国際交流センター講師．
4) YONEDA Yukiyo:　大阪大学留学生センター非常勤講師．
5) ITO Tokumi:　学校法人岩谷学園　横浜簿記テクノビジネス専門学校教育マネージャー．

略称 ACTFL, 1967 年設立)から口頭面接テスト (Oral Proficiency Interview Test: 以下 OPI テスト)[1] のテスターとして公式に認定を受けた試験官によって行なわれた．本稿に先立ち「日本語中級話者における発話分析——ACTFL-OPI 基準の具体化を求めて——」(1996) が執筆者等により発表されている．前研究では，日本語中級話者(以下中級話者)の発話の特徴としてテクストの型，総合的タスクと機能，文法における正確さについて記述的・数量的に分析した．その結果，中級話者が上級話者に移行する過程での特徴を明らかにすることができた．

OPI テストは多方面で用いられている[2]が，学習者の口頭能力を測ってみると様々なタイプの発話実態に驚かされる．そこで，OPI 基準による上・超級話者の発話を具体的に分析し，母語話者との比較を行ないながら，その特徴を示すことに意義があると考えた．さらに，本稿では，上・超級話者の発話の分析によりその移行過程を示し，あわせて日本語母語話者との相違にも触れた．

1–2. 研究の目的

ACTFL-OPI では全体的評価を採用しており，OPI 基準の 4 つの項目[3]はそれぞれ独立しているわけではなく，互いに影響し合い絡みあった結果として 1 つの評価を導き出している．

そこで，本研究では，被験者に求められた課題とその答え方に注目し，発話内容領域(定義は **3–1.** に提示)という概念を設けた．この発話内容領域は，ACTFL-OPI 基準における内容とは異なる概念であり，本稿において新たに設定した言語活動の難易度を示す基準である．

まず，試験官の質問とそれに対する被験者の応答を発話内容領域から分析して，被験者がどの領域で話せるかをみる．次に，この発話内容領域を軸として，以下に示す項目がどのように関わっているかを分析し，上・超級話者の発話の特徴を明らかにする．

分析項目:

(1) 発話の構成でみるタスク達成 . . . 発話内容領域別に，個々の発話機能をフローチャートに示し，どのように発話が構成，展開され，タスク達成につながるかをみる．

(2) 談話の形 . . . 発話内容領域によって，どのような談話の形(段落・複段落など)が現れ，段落から複段落へどのように移行するかをみる．

(3) 文法能力 . . . 語彙の広がり，誤用の現れ，接続表現の使用，言い直しなどがどのように変化していくかをみる．

発話の構成・談話の形・文法能力に関する能力基準について，ACTFL-OPI では記述的に概念だけが示されており，具体的に個々の定義が示されていない．そこで，本稿では，数量的・明

---

[1] ACTFL-OPI テストは，外国語における話し言葉の熟達度を測るためのインタビュー方式によるテストのこと．テスト法，評価基準については牧野 (1991)，牧野ほか (2001) を参照されたい．

[2] 政府の委託を受けた諸機関，大学等の教育機関，民間企業などで活用されている．

[3] 総合的タスク・機能，場面／内容，テキストの型，正確さの 4 つがある．評価基準は，「ACTFL 言語運用能力基準」(1999 年改訂)，牧野ほか(2001)に記述されている．

表1 被験者の背景

被験者	レベル	出身地	性　別
A	上級の下	韓国	男
B	上級の下	インド	男
C	上級の中	韓国	男
D	上級の中	アメリカ	男
E	上級の上	香港	女
F	上級の上	タイ	女
G	超級	中国	女
H	超級	韓国	女
I	母語話者	日本	男
J	母語話者	日本	男

示的に各レベルの特徴を示すために，以上の3項目についても独自の分析基準を設けた．また，このような研究は，個別の学習者の言語能力が一定のレベルを示す際の座標軸となるものであり，全体的評価を旨とする ACTFL-OPI の考え方に合致していると思われる．

2. 被験者の背景

本研究に携わる7名のテスター有資格者が，OPI テストにより上級・超級と認定された録音テープ20本から，超級，上級の上，上級の中，上級の下(以下上―上，上―中，上―下とする)の典型的なテープ各2本合計8本を選んだ．それに，非母語話者と同じ方法を用いて OPI テストを行なった母語話者のテープ2本を加え，合計10本のテープを分析対象とし，選別したテープの発話スクリプトを用い，分析を行なった．

被験者を A～J で示し，被験者の背景は表1にまとめた．また，各発話例には被験者を示す文字とターン番号の数字(例: A 15)をつけ，試験官の発話は R で示した．

3. 発話内容領域

3–1. 発話内容領域の設定

試験官がそれぞれの被験者に合わせて設定した様々な話題と質問の形式に対して，被験者がどのような関わり方をするかという観点から，試験官の質問の話題と質問形式及び被験者の応答の話題と述べ方を，言語活動の難易度により3段階の発話内容領域に類別した．

I	生活上頻繁に遭遇する出来事・話題について，事実を，簡単な言語構造・形式で，日常的語彙を使って直接的に述べるもの (例: 学歴，職業，家族，食べ物，趣味，毎日の生活，本・映画の名前などを簡単に話す)
II	被験者自身に関する事柄や一般的な話題について，事実を具体的に，一般的な語彙や複雑でない表現形式・構造を使って，詳しく説明したり比較したりする (例: 仕事の内容，出身地の様子，訪問地の印象，映画・本の内容，自国の住宅事情等を説明する．外国と日本の生活や学生などを比較する)
III	社会問題などについて，抽象的に，複雑な言語形式を使って，意見を述べたり，現象や概念を説明するもの (例: 教育制度の問題・環境破壊への対策・老人問題，テレビ番組の規制・銀行の評価・香港返還・日本が果たすべき役割についての説明や意見を述べる)

ここでは，発話内容領域を「話題の範囲，日常遭遇する機会の多少，対応に必要とされる言語活動の複雑さ・言語知識の多少，述べ方の抽象性を基準として類別した言語活動の領域」と定義し，難易度により以下のように発話内容領域 I, II, III (以下領域 I, II, III とする)を設けた．発話内容の具体例も付記する．

3–2. 発話内容領域の判定

被験者が何が話せるかを知るために，OPI テストの対話モード(試験官の質問に答える形で会話が進められる部分)の全発話について，試験官が質問によって被験者に対応を求めた発話内容領域(以下領域とする)と，被験者の実際の応答の領域を判定し，試験官の要求した領域別に被験者の対応を俯瞰した．

被験者の発話の発話内容領域は，同じ問題について関連して話し続けているものはターン数に関わらず連続した発話と捉え，1 発話として判定した．試験官が領域 I の質問をしても，被験者が領域 II で答える場合がある．例えば，「最近どんな映画を見ましたか」という領域 I の質問に対して「タイタニックを見ました」と答えれば，領域 I であるが，「タイタニックを見たんですが，とても凄かったです．主人公の青年が死んでしまうところは，かわいそうでした．それに，船の中がきれいで . . .」などのように映画の内容や感想を述べた場合は，領域 II と判定した．

また，上・超級話者の発話の発話内容領域を判定する中で，領域 II, III それぞれの領域の範囲内で，質に差がある発話が認められた．そこで，より詳しく観察するために領域 II にマイナス (–) とプラス(+)，領域 III にマイナス (–) を設けた．領域 II^-, III^- の発話とは ① 語句や文法の使用が不適切なために表現意図が明確でないもの，② 試験官に何度も追加質問されてやっ

と意志が伝達できたもの，③ 情報量が少なく，内容が十分に伝わらないもの，とした．領域 II^{+} の発話とは，具体的内容が主であるが，抽象的内容も一部分入っているものである．それらの発話例を示す．

領域 II^{-} の発話例（① の理由による）

D71: チャーターというのは，あのねー，食事するときに，○○大学で食事するときに，決まっているクラブで食事するから，パーティーがおおいから，そのクラブの人たちと，あの，遊んでいるから，私のクラブはチャータークラブと．

領域 II^{+} の発話例

E31: ハハハ，とっても厳しいですね。あんまり，実はあんまり，あの，一日中向かったことは．あんまり，理解してないといえるかもしれないんですね．あんまり話す機会がなかったんですよ．すごく厳しくて，あの，話すとき，ちょっと間違ったら，もう叱られるくらい，厳しいんですよ．だから，やっぱり，世代の断絶があるじゃないかと思うんですよ．

3–3. 発話内容領域の判定結果

質問の発話内容領域ごとに，被験者の発話の発話内容領域を判定した結果を図 1〜3 に示す．

図 1 の領域 I の質問では，上—中以上では領域 II で答えるものが現れ，詳しく説明しようとする傾向がみられた．図 2 の領域 II の質問では，上—上以上は全て領域 II で答え，超級，母語話者は領域 III で答える場合もあり，具体的な発話内容領域の質問を抽象的な内容にまで展開している．それに対して，上—中，上—下は一部，領域 II^{-} や I になることもあり，具体的な内容が詳しく話せない場合がある．図 3 の領域 III の質問では，上—下，上—中は領域 III

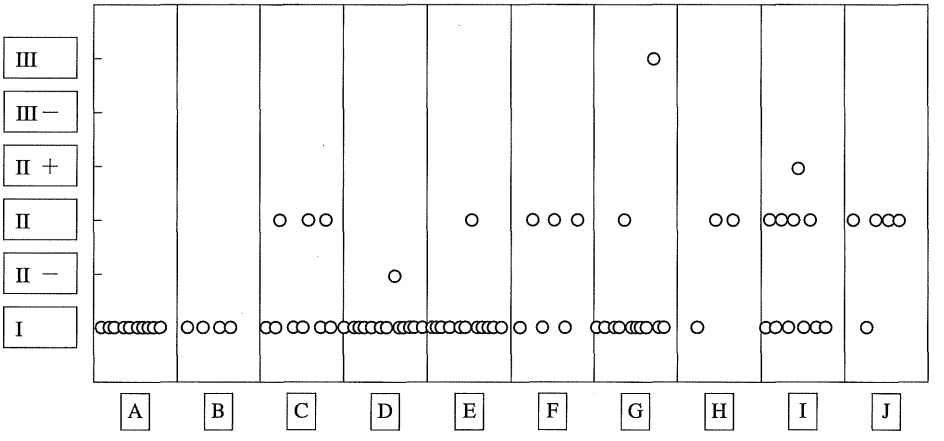

図 1　領域 I の質問に対する被験者の対応

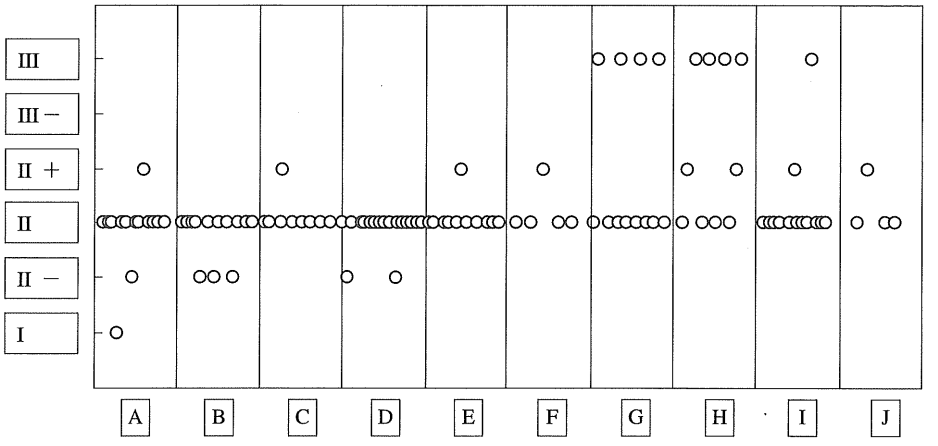

図 2　領域 II の質問に対する被験者の対応

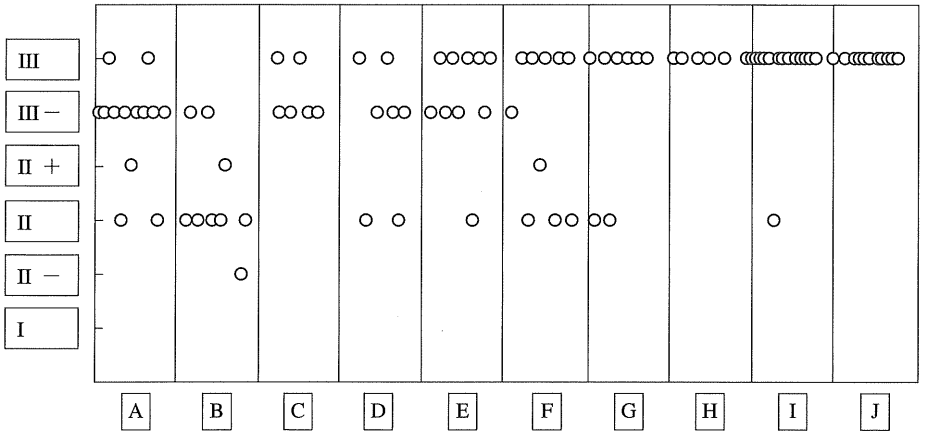

図 3　領域 III の質問に対する被験者の対応

で答えるより III⁻ から II⁻ で答えるほうが多く，抽象的な内容はまだ十分に話せないことがわかる．上—上は領域 III で半分答えており，要求された発話内容領域にかなり応じられるようになる．超級，母語話者は圧倒的に領域 III で答えており，抽象的な内容を十分に述べられるといえる．

以上のことから，領域 II, III において十分に述べるためには，発話の流れを組み立てる構成力，発話の内容をまとめる段落構成力，発話を支える語彙や文法の力などが大きく関わっていると考えられる．そこで，以下の章では発話内容領域を軸として，発話の構成とタスク達成，談話の形，文法能力について詳しく分析する．

4. 分析と結果

4–1. 発話の構成でみるタスク達成——どのように話せるか——

4–1–1. OPI 基準に示されたタスク達成と発話の構成に関する基準

超級	具体的・抽象的双方の視点から，議論したり，複雑なことを詳細に説明したり，筋の通った長い叙述をしたりできる．意見を明白にし，裏付けるために，上手く構成された議論をしたり，仮説を立てたり，それを発展させられる．
上級	具体的で事実に基づいた情報を伝えるために，長い叙述や詳細な描写をすることができるが，意見の根拠を述べたり，仮説を立てたり，抽象的な議論を続けることは，一貫して行なえなかったり，洗練した的確な言語で行なえない．

4–1–2. 発話の構成で見るタスク達成の分析方法

発話内容領域別に各被験者がどのような発話構成・展開でタスクを達成しているかを分析した．まず，① 試験官から与えられたタスクが達成できたかどうかを判定し，達成できたもの(○)，不十分だが答えられたもの(△)，全くタスクを達成できなかったもの(×)に分けた．質問に対する直接的な応答はあるが，言い直しの多さや文法・語彙力の不足から，意味が曖昧で分かりにくいものや，質問の中心からずれて的外れな応答になったものなどを不十分と判定した．次に，② 国立国語研究所（1994）で分類されている単位方略[4]によって構成要素に分け，③ 構成要素の展開をフローチャートで示し，④ 意見の裏付けをしている事実の指摘・事情の説明の構成要素が，具体的に述べられているか，抽象的に述べられているかを判断した．実体のあるものや個別的な事例を挙げて述べているものは具体的，思考・現象・性質などを概念的に表現しているものは抽象的と判断した．

図 4 に，C（上—中)の韓国での公害問題についての発話をフローチャートで示した．R33 は公害問題についての情報提供の要求で，それに対し，C33 は具体的な例(「問題になるのはダイオキシンである」)を挙げて事実の指摘をした．かっこ内の斜線 ▨ は具体的であることを示している．続いて，「ダイオキシンの問題が話題になった」，「自分の立場になって考えた」という事情の説明をし，事実の指摘(「日本でも同じ状況だ」)と事情の説明(「ダイオキシンの問題が癌に発展することもある」)をして，次に述べる意見の裏付けとしている．最後に「地球全体の問題として，政府が何かをやらなければならない」と意見を述べている．「それを建てならない」「問題が表示

[4] 単位方略を利用したが，方略とは「あるタスクを遂行するために必要な手順の総体」を意味し，単位方略とは，その方略の各部分に相当する類型化された行動様式であり，方略よりさらに様式化された普遍性を持つ行動である．国立国語研究所（1994）においても，様々な場面における基本構造を示すものとして単位方略が使われており，本稿におけるタスクを果たすための発話の構成分析の単位として，妥当なものであると判断した．例えば，見解を自分が表明することに関するものとして，感想の叙述，評価の表明，困惑の表現，見解の表明などが分類されている．

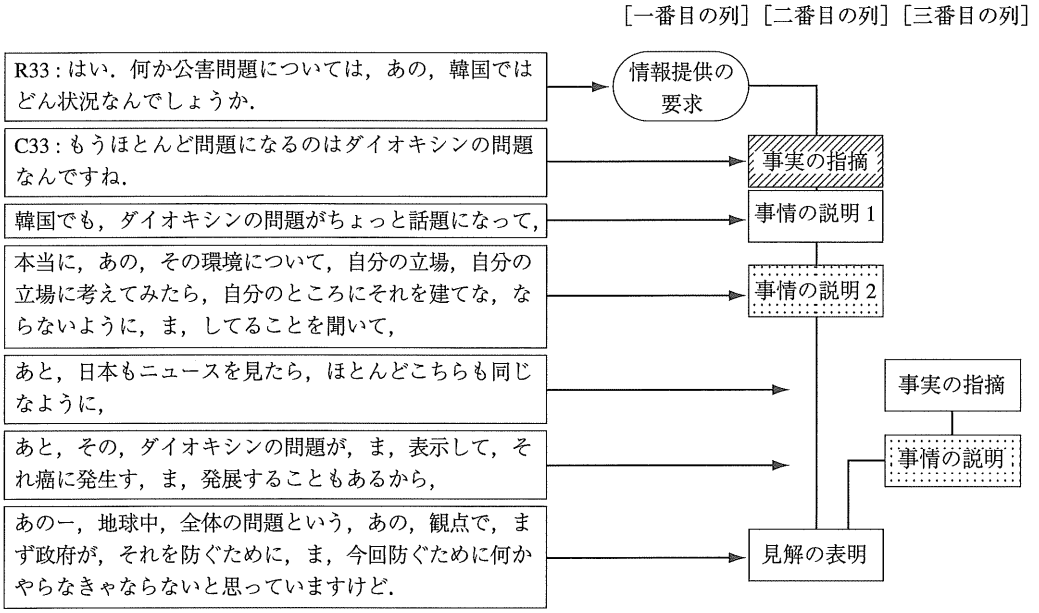

図 4　フローチャート化の例

表 2　タスク達成結果

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
内容領域 II	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○
内容領域 III	△	△	○	△	○	△	○	○	○	○

して」などを含む事情の説明は，表現が不明瞭で内容がわかりにくいため，⁞⁞⁞ で曖昧さを表示した．

このように，フローチャートは，発話の時間的流れを縦のラインで示した．内容的につながらない部分は，ラインを切り「×」で示した．一番左側の列は，試験官の質問を表し，二番目の列はその質問に対する被験者の直接的な内容の応答，三番目の列は，直接的でない構成要素を示し，二番目の列の構成要素につながっているものは裏付けを表す．

4–1–3.　領域 II, III における発話の構成でみるタスク達成の分析結果

上級と超級の差が現れた領域 II, III のタスク達成結果を表 2 に，領域 III のフローチャート(各レベル 1 例)を図 5 に示した．

領域 II では，上—下のみタスクが十分に達成できなかった．領域 III では，上級のどのレベルにもタスク達成が不十分なものがあった．図 5 をみると，意味が曖昧なものは上級のみにみら

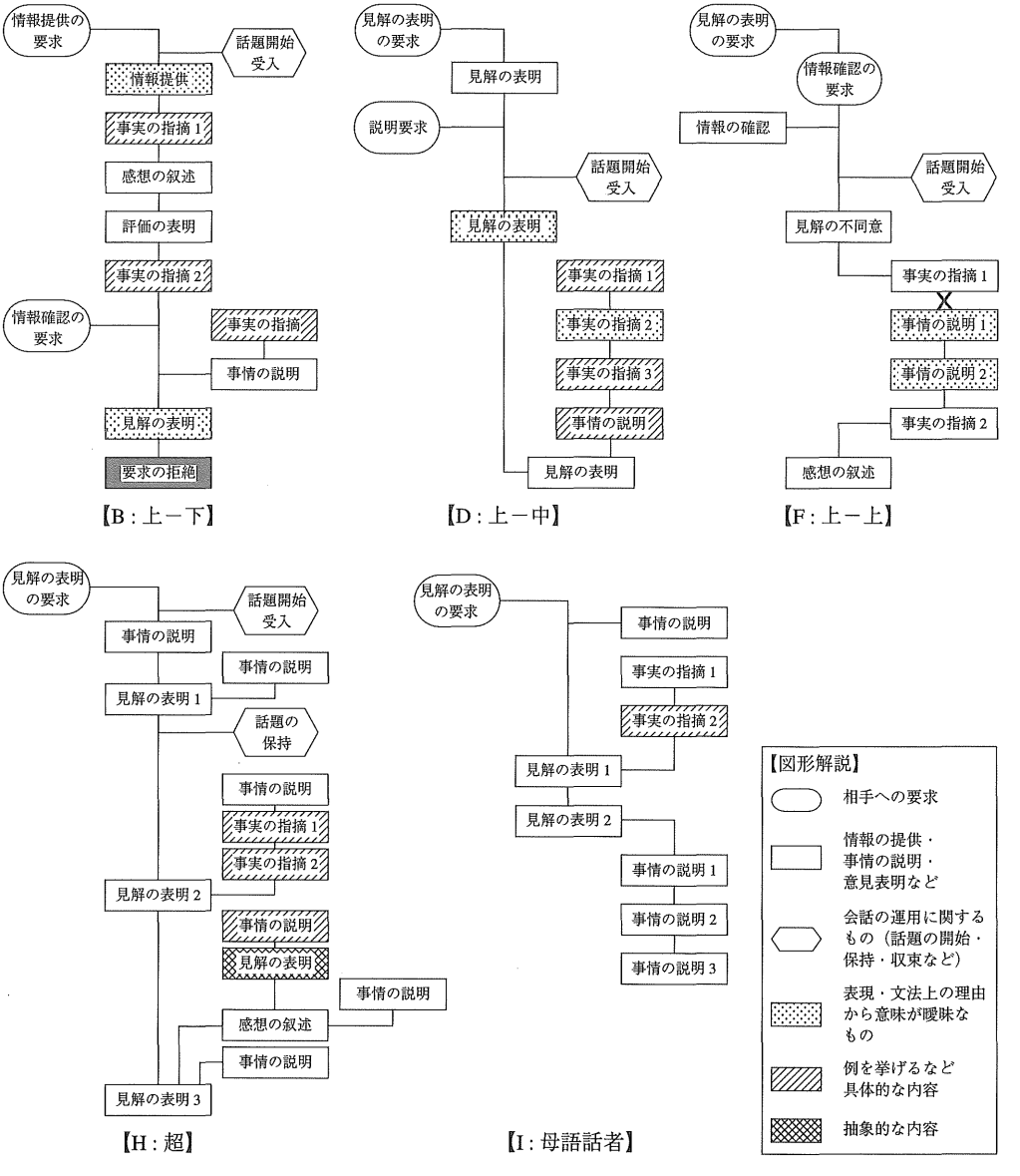

図5　内容領域 III における発話の構成

れる．また，上—下（B）では，意見が分かりにくいので再度試験官から要求があったが，「ちょっと日本語で，そこまでは説明できないです．」とはっきり拒絶をした（▭で示した）。質問に対して直接的な内容で見解の表明がなされたA, B, C, Eでは，見解を支える具体的な裏付けがみられた．超級の場合，タスク達成については問題がない．図5を見ると，見解の表明要求に対して3つの見解の表明がみられ，その話題について，いろいろな観点から意見を述べていることがわかる．しかも，すべての見解の表明について裏付けがなされ，その多くは複数の裏付けがなされている．また，裏付けにも背景となる説明(四番目の列)があり，階層的な論理の展開がみられる．さらに，裏付けは，具体的にも，抽象的にも述べられていた．

母語話者の場合も，見解の表明の裏付けは充実しており，複数の裏付けがみられたが，抽象的表現は直接的な見解の表明のみに現れ，裏付けにはみられなかった．また，試験官の要求のすぐあとには，直接的な見解の表明をせず，話題の周辺部分から説明を始めた．

4–1–4. 領域II, IIIにおける上・超級の発話の構成でみるタスク達成の特徴

上級では，領域IIで意見を裏付ける具体的な説明などがかなりみられる．上—下については領域II, IIIで，また，上—中，上—上については領域IIIで，明らかな拒絶や言語面での曖昧さ，話題の一貫性の欠如がみられ，タスクを十分に達成できないことがある．

超級は，論理に一貫性があり，複数の視点から意見が述べられ，しかも，階層的裏付けや複数の裏付けがあるため，説得力のある意見となる．また，抽象的な表現も使って概念的な話題も扱える．母語話者が，導入からすぐ本論に入らなかったり，1つの観点から意見を繰り返したり，階層的な裏付けがなかったりすることがあるのに比べて，超級は著しいまでの論理性があり，直截的に話している．

4–2. 談話の形——どんな形で話せるか——

4–2–1. OPI基準に示された談話の形

超級	抽象的な詳述をする場合でもためらわず，必要に応じて複段落を展開する．
上級	内的な完結性のある段落を構成する．上—中は，段落の形で詳細に叙述したり描写したりする能力を持つが，上—下は，非常に詳細な説明を求められた場合には，極度に短い談話になってしまう傾向がある．発話の長さは，せいぜい1段落止まりである．

4–2–2. 談話の形の分析方法

対話モードで試験官が明らかに説明を要求している質問[5]を取り上げ，それに応答する被験者の

[5]「～はどうですか」，既出の話題に対する「どんな～ですか」「何か～はありませんか」などを使った質問や，意見求め，反駁の要求など．

談話の形を分析した．上・超級話者の使用する談話の形を明らかにするために，文・連文・準段落[6]・段落・複段落の認定を行なった．次に，質問の発話内容領域別にそれぞれの談話の形の数を調べた．それぞれの OPI テストで，説明要求の回数，領域 I～III の割合は異なる．そこで，各被験者がどのような談話の形を使用しているか調べるために，発話内容領域ごとにそれぞれの談話の形の占める割合を算出した．

段落の認定は，伊藤他（1996）に準じたが，一文による構成であっても発話全体として内的な完結性のある場合，段落とみなした．例えば，一週間の予定を聞かれた場合，

C16: まあ，一週間というなら，平日，月曜日から金曜日まで全部仕事で，金曜日まで全部仕事で一生懸命やって，まったく土曜日のほうは，ま，教会に行くことで，ま，土曜日の午後から夜から，日曜日の方は全部日本語勉強で，ま，時間を過ごしていますけど．

「一週間というなら」という切り出しがあり，平日，土日の予定を説明し，「時間を過ごしていますけど」とまとめる構成が見られることから，段落と言える．

複段落とは「1つ以上の段落から構成され，新しい情報が文以上の形で先行の段落に関連づけて付加されたもので，論理展開が明らかで全体として結束性・一貫性がある発話の集合」と定義した．例えば B が将来の夢を尋ねられた場合，

B73: そうですね，あの一外交官になったもので，あのー，すぐ日本から(国名)へ戻らなくて，帰らなくて，他の国に行く可能性が多いです．

R74: あーそうですか．

B74: うん，また，あの，(国名)の内務省に，こういうことがあります．毎，各外交官は，うーん，あの1つの言語とか，うーん，専門になります，言語とか国とか歴史，社会とか，あー私の場合，私は日本語を選ぶまし，選びましたから，言語も日本語，と日本の歴史とか，あと，とか，日本通になりたいんです．アハハ，詳しくもっともっと詳しく知って．

まず自分の状況を説明したあと，自国の慣例について話し，最後に質問で要求されている将来の夢について述べており，前半後半に1つずつの段落を持つ複段落と考えた．

4–2–3. 発話内容領域別に行なった談話の形の分析結果

全質問に対する各被験者の談話の形を表3に示す．この表から，上・超級，母語話者では複段落が多くなることが指摘できる．説明要求がなされていない場合に現れた準段落以上の談話の形を「自発」として区別し，(　)に示す．この「自発」は複段落は超級以上に，段落は上級以上[7]に

---

[6] 内容的な統一はあるが，論理的な構成・展開が明確でないため，段落になりきれない発話.（伊藤他 1996 参照）

[7] 伊藤他（1996）では，中級話者にこのような段落はみられなかった．

表 3　説明要求に対する談話の形

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
説明要求回数	27	14 (8)	15 (4)	17 (5)	14 (8)	14 (2)	11 (7)	11 (1)	21 (7)	16 (6)
文	12	4	3	3	1	0	0	0	2	0
連文	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
準段落	3	2 (2)	5 (1)	1	0 (1)	2	0	0	0	0
段落	10	4 (6)	7 (3)	12 (5)	9 (7)	7 (2)	4 (5)	3 (1)	11 (7)	5 (4)
複段落	0	3	0	1	4	5	7 (2)	8	8	11 (2)

注: (　) は，要求されていないのに答えた準段落以上の発話の数.
それぞれの回数に (　) の数字は加えていない.

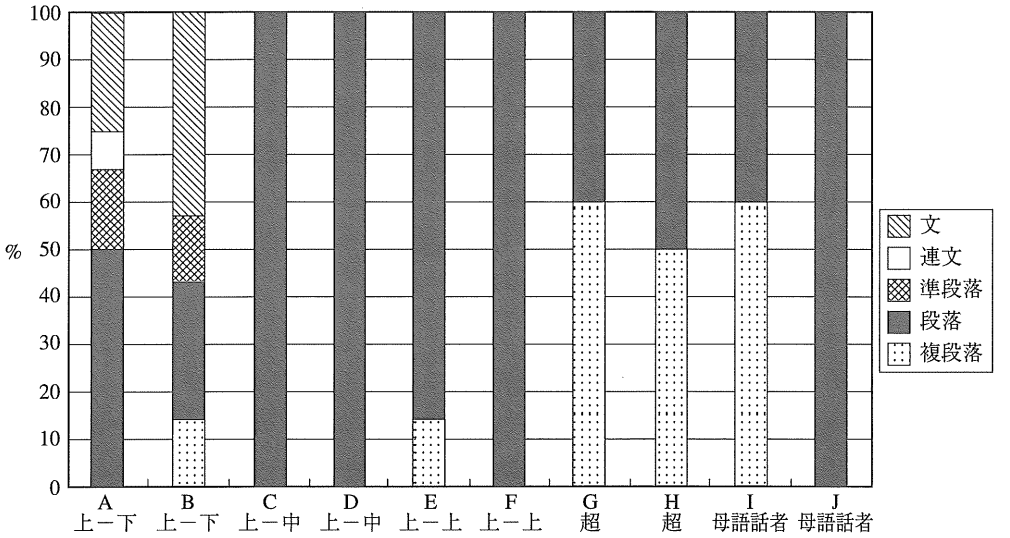

図 6　領域 II での談話の形の割合

現れている．これは被験者が気楽に展開できる談話の形を示すと考えられる．

領域 II・III について，被験者ごとの談話の形の割合を図 6 と図 7 にまとめた．図 6 をみると，領域 II で上—中以上は全て段落以上の形で述べている．上—下には文・連文もみられるが，固有名詞を忘れるなどのために答が短くなった結果と解釈できる．図 7 をみると，領域 III で，超級は全てを段落以上の形で述べている．複段落の使用は，母語話者と比べても多く，H はすべて複段落で答えている．上—上では 70% 以上を段落以上の形で答えており，複段落は 40% 程度である．

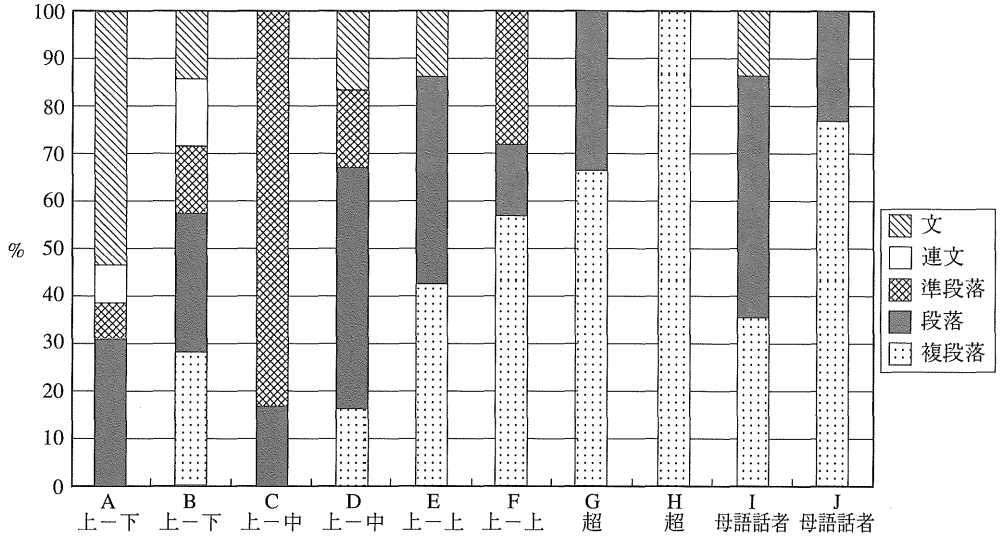

図 7　領域 III での談話の形の割合

4–2–4.　上・超級話者における談話の形の特徴

上級は領域によって談話の形に違いがみられた．上—下は領域 II でも準段落を含めてやっと半分以上であり，領域 III では，準段落を含めても 40% に達しない被験者もあり，抽象的な内容はほとんど扱えない場合もある．上—中は領域 II については十全に段落を構成して述べることができるが，領域 III では複段落は少なく，準段落も現れ，抽象的な話題を述べるときには不明瞭になってしまう様子が分かる．上—上は領域 III で複段落が半分近く現れることから，抽象的な話題もかなり詳細に述べられる．詳細に述べるという機能が十分に達成できるのは上—中からということが指摘できる．

超級話者は領域 II では半分以上を複段落の形で答え，領域 III では 60% 以上を複段落で構成している．抽象的な話題についても詳しく述べられていることが証明できる．

4–3.　文法能力——何を使って話せるか——

4–3–1.　OPI 基準に示された文法能力

超級	基礎的文法を自由に使いこなせ，パターン化した誤りがない．複雑なものは，間違えることもあるが，間違いがあっても，聞き手を混乱させることはない．
上級	過去・現在・未来時制を用いて叙述などができ，話をつなげることができる．単語，形態，統語，発音などが常に正確で適切であるわけではないが，聞き手は話を理解することができる．

4–3–2.　文法能力の分析方法および結果

文法能力は，前述の発話内容領域・発話の構成・談話の形に関連して，とくに ① さまざまな

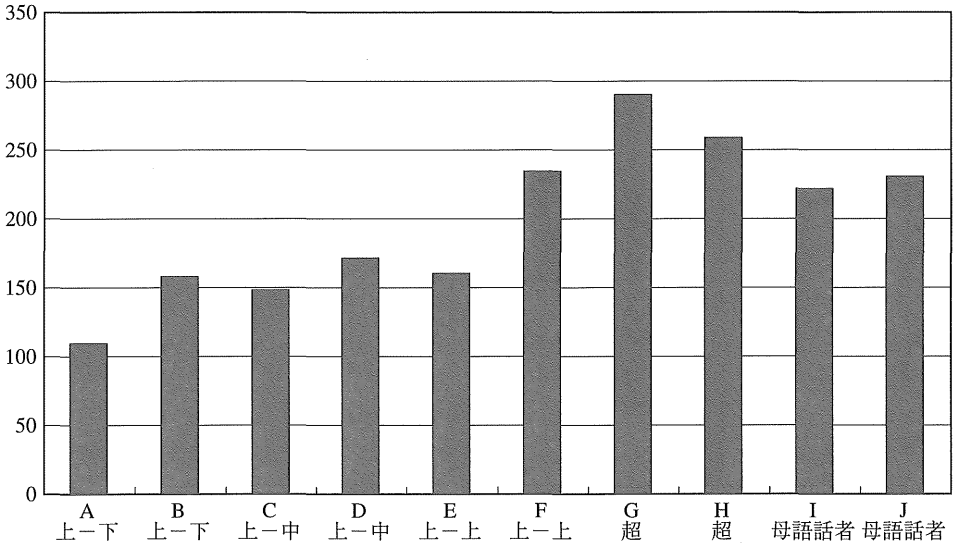

図 8　和語の異なり数

発話内容領域について述べるための語彙力があるか，② 表現を豊かにするための慣用句，擬音語・擬態語を使っているか，③ 聞き手を混乱させないための正確さとして，誤用が少ないか，過度の言い直しがないか，話の展開を助ける接続表現が使えるか，の 3 つのポイントに注目して分析した．

(1)　和語・漢語の語彙力

いろいろな話題に対応できる語彙力を調べるため，異なり機能語(和語・漢語)を数量的に分析した．和語は玉村 (1978)，漢語は佐藤 (1979) に従って認定した．その結果，異なり機能語数では上級が 193～335，超級が 406～421 とレベルが上がると増え，母語話者(359～398)より超級の方が多い．和語・漢語ともにレベルが上がると増える．特に，和語の異なり数は，母語話者より超級の方が 40 語近く多い(図 8, 9)．

(2)　慣用句・擬音語・擬態語

慣用句は，阪田 (1991) により，擬音語・擬態語は金田一 (1978) により認定し，異なり数を調べた．その結果，上―下では使用が全くみられず，上―中以上では全員に 1～6 種の使用がみられた．母語話者 I は 4 種，J は 10 種の使用があり，使用数については個人差があるように思われる．

(3)　正確さ――誤用・言い直し・接続表現――

誤用について，頻度を調べ[8]表 4 に示した．総誤用数では超級は上級の半分程度に減っている．

[8] 本研究メンバーが明らかに誤りであると判断したものを誤用として数えた．

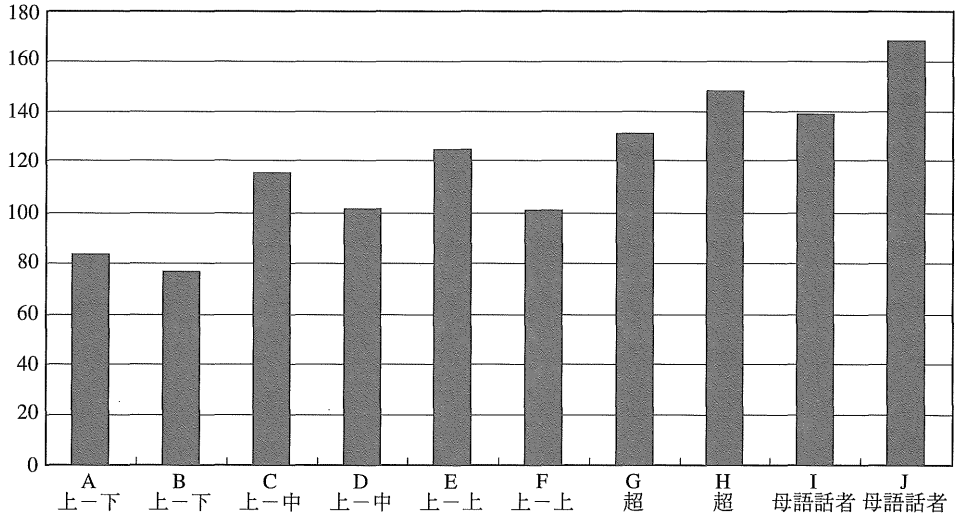

図 9　漢語の異なり数

表 4　語彙選択，文法の誤用数

被験者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
語彙選択	7	10	10	10	13	9	2	5	0	0
文　法	5	17	23	18	16	25	5	10	0	0
総誤用数	12	27	33	28	29	34	7	15	0	0

特に，文法の誤用については，上級で比較的単純な文法においてパターン化した誤り[9]が多くみられた．C の場合，「今夏なんですから / 事故が起こったんですから / 履いたことがないんですから」のように「ので」とすべきところを「～なんですから」と発話している．また， D では，「去年に行きました / この前に買った / 将来に帰る」など助詞「に」の付加がみられる．超級話者 H では，「親戚やめましょうという話が出てくれば(きたら)，どうするかなと言うような心配」のような使用頻度の少ない複雑な構文を使おうとした場合にみられた．

次に，聞き手にとって言い直しがわかりにくさの原因の 1 つであると考え，言い直し箇所について分析した．言い直しには，初・中級で見られる「たい，たい，たいよう，たいよう，たいどう，体操，体操」のような同一語彙を繰り返すタイプの言い直しはなく，次のような言い直しがみられた．自分で自分の発話をモニタリングして明らかに不適切な語彙・表現の誤りに気づき，「誤りや不適当なものを言い直した」(小坂 1997)「自己修正」による言い直し (C33)，最後まで

[9] 2 回以上同じ誤りをした場合，パターン化とみなした．

表 5　言い直し総数

被験者	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
総　数	9	7	14	11	6	13	2	3	0	0

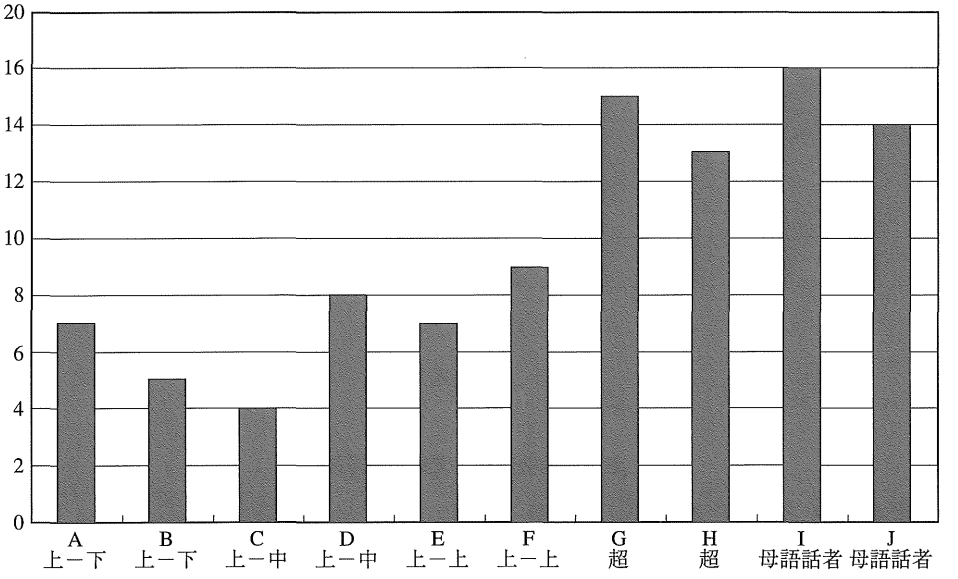

図 10　接続詞の異なり数

言い切れなかった文を再度，文型をかえて言い直しを試みたもので，Faerch & Kasper (1984) によるストラテジー分類の 1 つにあたる「再構成」による言い直し (F40)，間違いは犯してないが，「同じ事柄を別の言葉でわかりやすく易しく言い替える」(ビービ 1998)「言い替え」による言い直し (G28) である．このうち，G28 のような「言い替え」による言い直しは，大石 (1997) に「不整文すべてがマイナス価値のものというわけではない」とあるように，聞き手にとっての分かりにくさにつながらないと判断し，言い直し数に加えなかった．

(下線が言い直し部分)

C33:　あと，そのダイオキシンの問題が，ま，表示して，それ癌に発生す，ま，発展することもあるから，

F40:　あの，例えば，. . . (中略) . . . 60% 以上，60% なら，あの点数がつけるなら，取れるんだったら，じゃ受け入れると言うことならいいんですけれど

G28:　人間てよくなるのがすぐですけども，よくなるというか，いいものに慣れる，レベルの高いものに慣れるのはすぐですけども

表 5 の通り，超級には誤りを直したものは少なかった．超級と母語話者に見られたのは聞き手

に対しよりわかりやすい語彙と表現を探して詳しく説明するための言い直しであった．今回，言い直し数に加えなかった言い替えについてみると，「H: 中国の，中国で出版している新聞が,」のように「中国の新聞」というつもりであったものが，「中国で出版されている新聞」とより詳しく説明を加える言い直しがみられた．母語話者にも「考，それで自分で考えればいいと思うんだけど,」のように「考えればいい」と言おうとしたが，「それで自分で」と語彙を加えてより詳しく説明する話し方が多く使われている．

次に，接続表現については，接続詞および接続助詞の働きをするものの異なり数を調べた．接続詞と接続助詞，接続助詞の働きをするものの認定は，森田（1985）に従った．

その結果，接続助詞の働きをするものは上・超級，母語話者とも 11〜17 でレベル間にあまり差はないが，接続詞では，上級と超級とではかなりレベルの差がみられた(図 10)．母語話者は超級とほぼ同じであった．

4–3–3. 上・超級における文法能力の特徴

上級は，異なり機能語数が上—下から上—上に上がるにつれ段階的に増えているものの，超級より 2〜4 割程度少なく，領域 III について十分に述べられない．上—下では慣用句や擬音語・擬態語の使用が見られず，接続表現も多くない．上級でもまだ誤用は多く，パターン化した誤りがどの上級話者にもみられる．そして，「自己修正」や「再構成」による言い直しが多く，わかりにくさとなっている．

超級は，語彙の量も増え，特に和語は母語話者よりも多く使用している．また，慣用句・擬音語・擬態語の使用も増え，豊かで生き生きとした表現を支えていると考えられる．語彙力の高さに支えられ，幅広い話題が扱え，具体的・抽象的な表現が可能となっている．超級では，より質の高いものを目指した言い直しが行なわれ，かなり高度な語彙選択力が働いていると考えられる．その上，母語話者と同程度の接続詞を使いこなして，話の展開を聞き手に分かりやすくしていると判断できる．このような文法能力に支えられて，超級でも誤りは見られるが，聞き手を混乱させることなく，領域 II, III のような複雑な内容を述べることができる．

5. おわりに

5–1. 発話内容領域を軸とした上・超級話者の特徴

ACTFL-OPI 基準で上・超級と判定された被験者の特徴を探るため，発話内容領域という概念を軸にして，何を，どのように，どんな形で，何を使って発話しているかを分析した．

上級では，領域 I の質問については何ら問題なく，領域 II で答えることもあるほど十分に述べられることが分かった．領域 II の質問については，上—下の発話が領域 II⁻ や I と認定さ

れたり，準段落が含まれることなどが分かった．また，準段落以上の応答は60% 程度であり，文・連文もみられる．OPI基準では，上級話者は段落レベルの形で話すとされるが，今回設定した談話の形の基準にそってみると，必ずしも全ての質問に段落の形を使って答えているのではないことが明らかになった．これは，語彙力や文法能力の不足による発話内容の曖昧さ，発話量の少なさ，構成力の不足によるものだと判断できる．上—中は，十全に段落を構成して述べることができるが，領域 II⁻ で答えることもあり，やや文法能力に余裕がないレベルであると思われる．

領域 III の質問については，上—下，上—中は，領域 III⁻ や II⁻ の答え方をしており，また，複段落で答えることは少ない．具体的な内容の裏付けをして意見を言えるようになるが，文法能力(言い直し，誤用の多さ，語彙力不足など)が原因で，発話の内容が曖昧になることや，的外れな応答・拒絶などがみられることで，聞き手にとって分かりにくい発話となっている．上—上は，領域 III でほとんど答えられ，複段落もみられるようになる．具体的な裏付けをして論理的に意見を述べているが，言い直しや誤用は依然として残り，語彙力や接続表現も限られることから，曖昧さが残っており，対応はできても的確さや明瞭さに欠けるところがある．

超級は，領域 I に対して II で，領域 II に対して III で答えることもあり，また，自発的に複段落を展開するなど，言語的な余裕がはっきりみられた．領域 III でも，6割以上複段落を構成し，豊富な語彙力や接続表現を駆使して，いろいろな視点から階層的に複数の裏付けを行ない，具体的・抽象的な表現を織り込みながら意見を述べている．言い直しも少なくなり，非常に論理的に構成された発話が展開できる．誤用が全くないわけではないが，より的確な語彙や表現を選んだり，母語話者以上の複段落使用，和語使用，緻密な論理構成などにより，誤用を分かりにくさと感じさせない発話ができる．

以上のように，発話内容領域別にみることにより，それぞれのレベルの特徴をより明確に具体的に示すことができた．

さらに，上級から超級への移行の様子も明確になった．移行は全項目でなだらかに行なわれるのではなく，項目によってレベル差が大きく現れるものがあった．発話の構成，抽象的表現の使用，文法能力の言い直し・接続詞使用・誤用については，上級と超級で明らかな違いがみられた．領域 II での，タスク達成，談話の形については，上—下と上—中の間に明らかな差が現れた．領域 III での談話の形については，上—中と上—上の間で大きな差がみられた．つまり，発話の構成とタスク達成・談話の形の各項目の運用能力は，OPIの基準で示されている上級・超級の間の大きな境界線以外にも，大きく変化する段階が各々別個に存在することが示唆された．

5–2. 母語話者との比較の考察

本研究の結果，今まであまり論じられなかった超級話者と母語話者の発話の違いが認められた．母語話者・超級話者ともに2例のみの分析であるが，いくつかの点で超級話者の方が母語話者よ

り勝っているかのような結果が観察された．発話内容領域についての分析では，領域 II の質問の際，超級話者の方が母語話者より領域 III で答えているものが多い．発話の構成の分析では，特に領域 III で，超級話者の方が母語話者よりも論理的に堅牢な話し方をしている．談話の形の分析では，領域 III で超級話者が大半を複段落で構成しているのに比べ，母語話者では文で答えている場合もある．文法能力の分析では，和語の異なり数が母語話者より超級話者の方に多かった．

これらの理由として，まず，母語話者にも学習者にもテストであることを断り，同内容の要求や同頻度の突き上げを行なっているが，両者が OPI をどのような場と捉えたかによって，大きな違いが生まれたのではないかと思われる．超級話者は，外国語学習者としてその学習の成果を示す場として捉え，持てる力を精一杯発揮しようとする．そのために事実関係を尋ねている質問に対しても意見を展開するような答え方をしたり，意見を尋ねられた場合には，さまざまな裏付けのある論理的な意見を複段落で展開していく．これに対して母語話者は，OPI を，語学力より人柄・知識・教養などが現われるインタビューとして捉え，初対面のインタビュアーに対してどこまで自己を開示するかという視点で対応するため，改まった堅い表現や語彙を使いながらも，積極的な主張や議論を避ける及び腰の対応になるのではないだろうか．

また，超級話者が，より正確に多種の言語機能をこなすことに腐心しているのに対し，母語話者はコミュニケーションの本来の姿である「相手を理解する・理解させる」こと，つまりよい人間関係を構築するほうに意識が強く働いているものと考えられる．そこで，試験官の質問意図に合うように，発話の複雑さ・論理性・抽象性・情報量などを柔軟に調整しながら話そうとするため，相手がどの程度の情報量を要求しているかが明確でない場合には簡単に質問を受け流し，さらに要求された上で適宜話していこうとする傾向が現れたのではないだろうか．

この発話の違いが OPI の捉え方の違いのみによるものか，また，言語活動上の能力の差，コミュニケーション文化の違い，性差や経歴の差によるものかは，今回の研究では明確にできなかった．

ただ，ACTFL-OPI マニュアルに言語運用能力について，概念的コントロール(概念的には気づいているが，実際にそれを使って何かすることはできない段階) → 部分的コントロール(不正確ながらも使う段階) → 完全コントロール(正しい形式で使いこなす段階)へと進むとあるが，これは学習者についての記述であり，母語話者は，完全コントロールとはまた異質の段階にあると考える必要があるのではないだろうか．

5–3. 今後の課題

今後の課題としては，まず，被験者の数を増やし，被験者の性別，漢字圏・非漢字圏などの違いや，今回分析できなかった社会言語能力・言語運用・タスクモードでの遂行能力・発音などの

項目についても検討していきたい.

また，本研究の結果から，非母語話者と日本語母語話者との比較において，非母語話者の到達目標は，母語話者と全く同様の発話ができることなのか，さらに言えば，目標言語の文化，思考方法などの完全習得も含まれるのかなどの学習の目標についての新たな疑問も投げかけることになった．これらの疑問に答えるために，今後より多くの母語話者の発話データを分析し，上・超級話者との比較を試みる必要があると考える.

謝　辞

当初より本稿執筆者5名と共に研究に携わり，貴重なご助言を賜った北澤美枝子氏(テンプル大学)，堀歌子氏(早稲田大学国際教育センター)に，感謝の意を表したい.

参 考 文 献

伊藤とく美，荻原稚佳子，北澤美枝子，齊藤眞理子，堀歌子，増田眞佐子，米田由喜代（1996）「日本語中級話者における発話分析——ACTFL-OPI 基準の具体化を求めて——」『JALT 日本語教育論集』第1号，79–99，JALT 日本語教育研究部会.

大石初太郎（1997）「話し言葉とは何か」『「ことば」シリーズ 12』，文化庁.

金田一春彦（1978）『擬音語・擬態語辞典』，角川書店.

国立国語研究所（1994）『伝え合うことば—4　機能一覧表』.

小坂昌子（1997）「自己修正と日本語の運用力の関係について」『日本語国際センター紀要』7巻，1–16，国際交流基金日本語国際センター.

阪田雪子（1991）『慣用句の辞典』，三省堂.

佐藤喜代治（1979）『日本の漢語』，角川書店.

玉村文郎（1978）「和語は造語力が弱いか」『新日本語講座 1』，汐文社.

土屋信一（1963）「談話語の実態」，国立国語研究所.

日本語 OPI 研究会翻訳プロジェクトチーム（2000）『日本語改訂版 ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル』，アルク.

ビービ，レスリー，M.（1998）『第二言語習得の研究』，大修館書店.

牧野成一（1991）「ACTFL の外国語能力基準及びそれに基づく会話能力テストの理念と問題」『日本語教育論集・世界の日本語教育』1号，15–32，国際交流基金日本語国際センター.

牧野成一，鎌田修，山内博之，齊藤眞理子，荻原稚佳子，伊藤とく美，池崎美代子，中島和子（2001）『ACTFL-OPI 入門——日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』，アルク.

森田良行（1989）『日本語表現文型』，アルク.

———（1985）『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』，明治書院.

Swender, E. (ed.) 1999. ACTFL Oral Proficiency Interview Tester Training Manual. Yonkers, NY: The American Council on the Teaching of Foreign Languages.

Faerch, C. and G. Kasper. 1984. Two ways of defining communication strategies. *Language Learning*, Vol. 34, No. 1.